

令和 6 年 4 月 3 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01340

研究課題名(和文) 器物の「伝世・長期保有」・「復古再生」の実証的研究と倭における王権の形成・維持

研究課題名(英文) Empirical research on the "tradition, long-term possession" and "restoration reproduction" of vessels, and the formation and maintenance of royal power in Wa

研究代表者

岩本 崇 (Iwamoto, Takashi)

島根大学・学術研究院人文社会科学系・准教授

研究者番号：90514290

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、器物の保有形態として古墳時代に顕在化する「伝世・長期保有」、それを背景とした製作指向性としての「復古再生」の実態を分析することにより、王権の形成・維持の観点から「伝世・長期保有」および「復古再生」がもつ社会的意義の解明を目的とした。共同研究によって明らかにしたのは次の点である。「伝世」が鏡以外の器物に確認できること、「伝世」の場には地域社会/王権/外部集団といった差があること、地域社会の「伝世」主体となる集団に規模や質の違いがあること、「復古」を複数の器物に認定しうること。「伝世・長期保有」「復古」には多様な類型があり、類型ごとに社会的意義は異なると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義  
世代を超えた器物の保有形態である「伝世」、一度断絶した古い型式のリバイバル生産である「復古」を、伝統性や正統性など権力にかかわる現象として評価してきた先行研究の片面的な理解を大幅に更新し、財の多様な維持形態を想定した点が本研究で示した最大の学術成果である。また、考古資料では変化に着目した歴史叙述が主流であるなか、物質資料の保有から集団や社会システムの継続性を具体的に実証する方法を提示した点にも学術的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：his research aims to form and maintain royal power by analyzing the actual situation of "traditional/long-term possession" that became apparent in the Kofun period as a form of possession of vessels, and "retro-reproduction" as a production orientation based on this. The aim was to elucidate the social significance of "traditional/long-term ownership" and "restoration and reproduction" from the perspective of  
The following points were clarified through the joint research. 1) "denise" can be confirmed in vessels other than mirrors, there are differences in the places of "denise", such as local society/royal power/outside groups, and there are differences in the size of the group that is the subject of "denise" in the local community. "Restoration" can be certified for multiple objects. There are various types of "traditional/long-term possession" and "restoration," and each type is thought to have different social significance.

研究分野：考古学

キーワード：伝世 長期保有 復古再生 古墳時代 弥生時代 王権

### 1. 研究開始当初の背景

考古学的な観点から器物の伝世を社会構造の変革と関連づけた概念に、「伝世鏡論」がある[小林 1955]。「伝世鏡論」では、弥生時代の漢鏡にみる「九州>近畿」の量的な偏在を解消させるため、弥生時代に流入した漢鏡が古墳の副葬品となるまで各地で伝世したとする。そして、古墳への副葬により鏡の伝世が途絶する点から、器物の保有主体が集団から個人へと転化し、そこに首長の出現といった社会構造の変化をよみとった。しかし、「伝世鏡論」の弱点は、無批判に伝世の場所をのちに古墳が築造される諸地域(地域社会)とする点にあり、近年はこの点における実証性の欠如から「伝世鏡論」は成り立ち難いのではないかとこの見方が勢いを増しつつある[辻田 2007、岩本 2014、上野 2018 など]

とはいえ、「伝世鏡論」を批判的にとらえたとしても、副葬年代を大きく遡る時期に製作された漢鏡が出土し、そのなかに文様が不鮮明となった鏡が存在する事実の要因や背景を説明しえてはいない。あるいは、「伝世鏡論」を反証したとして、それはあくまでも部分的な批判にすぎず、これに代わる新たな概念が提示されるには至っていない。これらの課題を克服するには、先行研究とは異なる視点からの分析とより包括的な議論が不可欠である。

### 2. 研究の目的

器物の「伝世・長期保有」・「復古再生」の実証と実態把握を基礎に、王権の形成・維持と器物の生産・保有との関連性を分析し、古代国家形成に至るプロセスを考古資料に即して究明することが、本研究の目的である。そのうえで、倭における「伝世・長期保有」および「復古再生」が当該期にいかなる社会的意義を有したのか、さらにはどのような歴史的意義をみだしうるかを考察を試みる。そして得られた成果をもとに、器物の「伝世・長期保有」・「復古再生」を視角とした分析・議論をより広く東アジアを舞台に展開し、さらに世界的視野も見据えた考古学研究や、歴史学・美術史・宗教学・文学といった異なる学問領域とも接続した人文学における総合的な議論へとつなげることをめざす。

### 3. 研究の方法

研究の目的を計画的に遂行し、達成するため、研究項目( / / )とその下位に研究小項目(①・②/③・④/⑤・⑥)を設けて、4ヶ年計画で段階的に研究を推進する。そして、器物横断的に総括的検討をおこない、研究をとりまとめる。

「伝世・長期保有」の実証的分析

①「伝世・長期保有」の年代論 「伝世・長期保有」は、器物の製作年代と副葬年代との著しい懸隔がなければ認定できない。そこで、製作年代と副葬(埋納)年代のズレの傾向を器物ごとに整理する。さらに、どの程度のタイムラグにより「伝世・長期保有」と評価できるのか、同一首長系譜における首長墓の交替とその暦年代の検討をもとに目安として具体的な数値年代を策定する。議論の下地となる弥生・古墳時代の年代論はここで検討する。

②「伝世・長期保有」と器物の経年変化 「伝世鏡論」では、鏡の文様が不鮮明となった要因として使用にともなう経年変化を想定する。しかし、この点については異論も多く、あらためて文様の鮮明な資料とも比較し、不鮮明な文様をもつ例の特質とその生成要因を明らかにする。また、鏡に限らず、そのほかの器物においても使用痕はもちろん補修・修理痕や部品の組み替えなど、経年変化への対応を観察できる例がある。これら器物にみる状態の変化が「伝世・長期保有」といかに関連づけうるのかを分析する。

「伝世・長期保有」過程の復元的検討

③「伝世・長期保有」の主体 「伝世・長期保有」を認定しづらなのは、考古学的にそのプロセスを把握しがたいことが要因である。この課題を克服するためには、「伝世・長期保有」の場を特定する方法を確立することが求められる。器物の保有主体は流通元(王権など)か、流通先(地域社会)かにおおよそ二大別できる。たとえば、倭王権による保有については器物の大量集積をとまなう副葬事例での組成の内容、地域社会による保有については同一の首長系譜における副葬品組成の内容を、それぞれ代表的な事例をもとに検討し、実証することを試みる。

④「伝世・長期保有」の途絶背景 器物の保有主体を特定することと関連して、「伝世・長期保有」が途絶して器物が副葬される背景を分析することは、器物を保有する意義を考究する手がかりとなる。そこで、「伝世・長期保有」が終了する時期の傾向と倭王権あるいは地域社会の動向との対応関係を把握するとともに、これをデータとして可能な限り蓄積して傾向を捉えることによって途絶の要因を解析する。「伝世・長期保有」の途絶の様相をパターン化できれば、保有主体を特定する議論にも資することが期待される。

「復古再生」と器物の様式論

⑤「復古再生」の実証的分析 器物の「復古再生」には、対象となった原型にあたる器物の社会的な意義を更新することによって、その正統性を継承・明示する意図を読み取りうる。この点に留意し、各種の器物にたいして「復古再生」の存在を実証する方法を整備する。そのため、原型候補の器物と「復古再生」候補の器物の共通点と相違点を整理し、明確な時期差が介在した

模倣関係を説明しうるかを分析する。さらに、「復古再生」には原型にあたる器物が「伝世・長期保有」される必然性があり、これに該当する事例を集成する。

①「復古再生」と器物の保有実態 「復古再生」の対象となった器物にみる選択性や偏在性の有無を検討し、その器物を「伝世・長期保有」した主体を特定することを試みる。具体的には、「復古再生」の対象となった器物に、時期的・系統的な選択がみとめられれば王権による保有を、有意なまとまりがなければ地域社会による保有を想定することも可能となる。また、原型となる器物が、日本列島における「伝世・長期保有」品か、新規流入した「伝世・長期保有」された舶載文物であるかを峻別し、器物の生産ないし搬入および保有のあり方から「復古再生」にみる背景の多様性とその具体的な内容について整理する。

#### 4. 研究成果

本研究では、器物の「伝世・長期保有」「復古再生」の実態を考古学的に把握するため、さまざまな器物を対象として検討を試みた。以下、各論で示された論点の整理をおこなうことにより研究を総括し、あわせて今後の研究の方向性を展望する。

##### 「伝世」の認定とその課題

「伝世」の概念・定義 本共同研究の議論の起点として確認しておかねばならないのが、「伝世」をどのように考え、定義づけるかである。この点については、各論においてもさまざまに言及を試みた。岩本論考 [p.12] と大賀論考 [p.56] で確認したように、「伝世」には世代を超える保有（短期の保有でも生じる場合がある）と、長期におよぶ保有という必ずしも一致するわけではない二つの状況が存在する。しかし、考古学的には時間の経過以外のプロセスで世代の交代を認識することは難しいため、長期におよぶ保有によって「伝世」を認定することが原則となる。したがって、考古学の方法においては、世代を超えるほどの長期におよぶ保有をどのように認定するかが課題となるのである。とはいえ、現実には10数年といった短期間のなかでも所有者の交代は散見される [細川論考]。つまり、考古学ではこうした例を認識しにくい限界がある点を十分に承知しておく必要がある。

「伝世」の認定方法と課題 森下章司が定義づけたように、製作年代と廃棄・埋納・副葬年代のあいだに2型式ないし2時期を挟む（3型式ないし3時期のずれをもつ）例を「伝世」とする認定は、「伝世」例を確実に抽出するための方法である [森下1998、岩本論考 p.12]。この認定方法は、大賀論考で示された、玉類にみる流通開始時のセット関係の崩壊と新出する種類を含む組成の成立によって「伝世」を認定しようとする分析方法とも結論的には整合する [p.67]。

いっぽうで、方法論的には多くの器物でじゃ「伝世」の認定が容易ではない。各種器物の編年では、いわゆる型式学的な分析によって分類単位の間隔を整理し、各分類単位の製作年代の上限と下限を廃棄・埋納・副葬年代から絞り込む方法をとる。新しい時期を示す廃棄・埋納・副葬例が確認されたばあい、それを分類単位の存続期間とみれば製作年代をやや長期に想定し、「伝世」とみれば製作年代を短期に見積もることになる。古墳副葬品としての鉄製武器、鉄製農具、馬具などは、廃棄年代を製作年代の下限とみなして相対編年を組み立てる「消費地編年」であるため [水野論考 p.81、諫早論考 p.137]、そもそも「伝世」を方法論的に認識しづらいのである。

「伝世」の頻度 上述のとおり、「伝世」の認定には器物によって多少の違いがある。しかし、そうした差を承知しつつも、それぞれの器物には具体的にどの程度の「伝世」例をみとめるのであろうか。定量的な分析を実施した三角縁神獣鏡では総資料数の約18%、緑色凝灰岩勾玉では約1/8（12%程度）が確実性の高い「伝世」とみられる [岩本論考、大賀論考]。鏡や玉類と同等程度に編年研究が進展している甲冑では、組成にみる乱れや廃棄年代までのタイムラグの検討によって、群馬県鶴山古墳の1例のみが「伝世」候補になりうるといふ [川畑論考]。ただし、その保有期間が実年代に置き換えた際には30～50年程度となるため、「伝世」とするには躊躇をおぼえる時間幅である。鉄製武器、鉄製農具、馬具については、廃棄年代までのタイムラグによって「伝世」を認定することとなるが、積極的に「伝世」とみなしうる事例は確認できない [水野論考、磯貝論考、諫早論考]。

そうした「伝世」頻度の違いは、器物の保有が個人への帰属を強くするものか、集団への帰属を強くするものかの違いに起因する可能性が指摘されてきた [森下1998]。甲冑や馬具を装備する馬の「属人性」の高さが「伝世」の少なさに関連する可能性はたしかに説得力に富む [川畑論考 p.120-123、諫早論考 p.139-141]。また、「着系器物」と「保有系器物」といった区分も「伝世」する器物を評価するうえで有効な視点となる可能性がある [上野論考]。ただし、鏡においても多くは入手した世代において副葬されるのであり、配布元での「伝世」が基本形ならば「属人性」が低いことにはならない。「伝世」をある程度みとめる鏡や玉類であっても、多様な鏡式や器種といった形式が存在しており、形式ごとに「伝世」の状況が異なる可能性もある。

上述したように、「伝世」が鏡と玉類ではほかの器物より高頻度でみとめられる状況にあるなか、先行する弥生時代の青銅器と玉類に長期保有が想定しうる点は示唆的である [吉田論考、谷澤2021・2022]。とりわけ、弥生青銅器においては社会変化といった歴史的意義につながる側面も想定される点は特筆されよう。ただし、「伝世」がみとめられるとしても、その絶対数は母数からみるとあくまでも少数派である。この点は、「伝世」が必ずしも目的的におこなわれるものばかりではなかった可能性を示唆しているのであろう。

「伝世」と器物の経年変化 玉類では「伝世」にともなって組成の変化が想定された [大賀論考]。いわゆる「伝世鏡」の議論では、摩滅による文様不鮮明を「手磨れ」と称して、「伝世」

の証左としてきた研究史がある〔梅原 1933〕。これについて岩本論考では、鑄造後に二次的に摩滅等で文様不鮮明となっただけの「手磨れ」は想定しうるが、その文様不鮮明が経年変化に正比例して顕著なる状況はうかがえないことを指摘した。また、保有期間が超長期でも経年変化のみられない資料もある。つまり、使用痕の有無や強弱は必ずしも「伝世」期間の長さ結びつくわけではないのである。とはいえ、「伝世」例に文様不鮮明鏡が散見される傾向もたしかにみいだせるので、評価がなかなか難しい。定量的な検討によってこの問題の解決をはかることが望まれる。弥生青銅器においても同様に「手磨れ」や摩滅は確認できるが、やはり青銅器表面の変化を時間に置き換えることは難しい状況にある〔吉田論考〕。同じく甲冑や馬具においても補修・改変の事例は確認できるが、一定期間の使用という実用性を裏づける根拠とはしえても、「伝世」には直接的に結びつくわけではない〔川畑論考、諫早論考〕。農具における使用痕も同じような脈絡で評価しておくのが穏当であろう〔磯貝論考〕。

#### 「伝世」の過程と意義

器物の入手契機・形態と「伝世」 「伝世」がどこでおこなわれたかを明らかにするためには、前提となる器物入手のあり方を検討しておく必要がある。古墳時代の鏡については古くに小林行雄によって首長としての地位承認が保有の契機になると説明された〔小林 1955〕。本共同研究ではこの論点に関連して、上野論考のなかで鏡のサイズに着目した検討をおこなっている。とくに古墳中期の有力首長墓に副葬された鏡には多彩なサイズが揃い、当該期に生産していない大型鏡を含むため、それら鏡群の入手が副葬時期に近い時点でなされたとする。さらに、サイズ差は地域内での二次分配を可能とする保有形態だと評価する。

入手契機については、古墳副葬品であれば被葬者の生前のどの段階で入手したかが論点となる。先の器物の経年変化でもふれたが、補修や改変の事例からは実際の使用期間を見積もることが可能であり、ある程度の保有期間が見込まれることとなる。「伝世」の実態に迫るには、個々の器物の入手にどのような意味と背景があったのかも視野に入れた議論が必要だといえよう。

「伝世」の主体 本共同研究では、「伝世」例の出土傾向などをふまえて、「伝世」の場にくつかの類型を設定しうることを明らかにすることができた。すなわち、基本類型としての、④首長墓系譜など有力集団（流通先）での保有〔森下 1998 など〕、⑤倭王権に代表される中枢勢力（配布元）での保有〔岩本論考、上野論考〕、⑥地域集団間での反復的な移動をともなう保有〔大賀論考、岩本 2022〕、⑦より隔絶された空間にある外部集団における「伝世」〔吉田論考〕である。なお、上野論考で想定された鏡のサイズ差にもとづく地域内での二次分配は、類型④・⑤をも生じさせる理解である点には注意が必要である。

上記の4類型はいかにして識別しうるのか。類型④であれば、同一系譜上にある首長墓に同時期に入手した鏡が分有される状況が想定される〔森下 2008〕。端的にいえば、「同範鏡」「同型鏡」「同工鏡」などといった高い共時性を示す資料群が首長墓系譜内の異なる時期の首長墓に副葬されるケースがあれば、類型④である蓋然性は高いといえる。

類型⑤については、「伝世」対象に偏在や一定の傾向といったパターンを想定できる場合がもっとも容易に認定しうるであろう。具体的には、三角縁神獸鏡のなかでも特定の時期のものに偏る場合は、地域を超えた共通性をみとめることになるため、類型④・⑤の可能性は排除できるとする見方である〔岩本論考〕。なお、細川論考で示された例示された有力者間における器物の移動事例は、類型⑤に該当するものが基本であると理解しておきたい。類型⑤では、分配・分与・贈与が社会関係の形成や維持に際して特別な意味をもちえた可能性を評価しておきたい。王権の形成・維持といった側面が「伝世」とむすびつくのであれば、それは類型⑤において生じる可能性が高いと考える。

類型⑥では、限定的とはみなしがたい一定空間の幅広い階層において、同時期に入手したと考えられる資料が分散する状況が想定される。大賀論考でも指摘されたように、「伝世」品が上位層よりも下位層に多いことも判断の指標になる。破鏡や超小型鏡のように上位層では顕著でなく、量的副葬がなされないケースも類型⑥の「伝世」パターンとみなすことが妥当であろう〔岩本 2022〕。

そして類型⑦は上記のパターンとは異なって、先行する段階に廃棄がみとめられないケースであり、「伝世」品が外部から移動してきた状況を想定するものである。この類型⑦外部集団における「伝世」には、弥生後期の対馬の銅剣が該当する〔吉田論考〕。古墳出土の「伝世鏡」の「伝世」の場を列島外とみる見方〔辻田 2001・2007 など〕もこの類型となる。あるいは、上野論考で想定された古物発見などともなう新たな保有の発生も、本質的には外部集団からの器物の移動に近いものと考えられよう。

「伝世」の背景と意義 「伝世」の背景を考える起点として、「伝世」が目的のおこなわれたかどうかを明らかにすることが必要となるが、それは「伝世」じたいの意義を問ううえでも重要な論点となりうる。具体的には、これまでも生産量の変動的な変動ともなってストックが形成されることによって、「伝世」が生じたとする見方が示されている〔大賀 2005〕。この場合は、「伝世」ははからずも生じたことになるため、「伝世」の社会的な意義は弱まることとなる。いっぽう、三角縁神獸鏡のように舶載鏡に「伝世」例が著しく偏在する事実をもって、その「伝世」を目的とする理解もある〔岩本論考〕。とくに三角縁神獸鏡では「伝世」例が副葬される時期に倭鏡として復古的に模倣される例があるが、そのモデルが舶載鏡に限定されることとも整合し〔岩本 2020〕。目的的な「伝世」を想定する材料となる。この場合は、「伝世」に特別な社会的な意義を付与しうるであろう。「伝世」が生じた背景に迫るには、「伝世」現象そのものから

だけでは限界があり、「復古再生」といった関連事象からの検討も有効であることをここでは強調しておきたい。

さらに「伝世」が目的的におこなわれたのであれば、それがもつ意義として世代交代や地位継承、特定の階層や社会的位置との関係、「伝世」の主体となった集団の性格と「伝世」との結びつきを考慮する余地が生ずる。系譜意識や同祖意識、信仰内容などといった集団を特徴づける要素、あるいは特殊な人的つながりや社会的関係が「伝世」をうながす契機となった可能性がでてくるであろう。「伝世」がもつ意義に「正統性」の表示を想定する理解は〔岩本論考、上野論考、細川論考〕。そうした「伝世」を支えた集団や人的つながりの性格を積極的に評価した視点である。また、「伝世」の頻度が高い鏡や玉類といった器物については、潜在的に正統性を象徴する側面が付与されていたと考えることも可能であり、「復古再生」をからめた議論によってさらなる実証的な説明も期待されるところであろう。

「復古再生」の認定と意義

「復古再生」の定義・認定 「伝世」にかかわる関連現象として、本共同研究では「復古再生」について積極的な議論を展開することにつとめた。「復古再生」にはそのモデルとなる器物の存在が必要であり、そこには「伝世」が介在する可能性があるからである。と同時に、あまり細かく限定せずにやや幅広く「復古再生」の可能性のあるものも含めて検討をおこなうことで、考古学的に認識しうる「復古再生」がいかなる現象であるのかを議論することとした。したがって、本共同研究ではひとまず「復古再生」の定義として「古さ」を重視したりバイバル製作といった限定的な内容にはせず、先行するデザインの再生とみなしうる現象を幅広く分析対象とした。「復古再生」にかかわる考古学的な議論はようやくはじまったところであり、今後の検討に委ねるべき部分が多いため、ここで述べたように「復古再生」の定義をひとまずはややゆるやかな内容としておくのが考古学的には妥当であろう。今後のさらなる分析例の蓄積によって、考古学的により妥当かつ厳密な「復古再生」の定義が可能となるにちがいない。

上記の定義に即しても、「復古再生」は少なくとも古いデザインの復活を意味する。したがって、考古学的には時間的な断絶を介したデザインの類似現象をとらえることによって、その認定が可能となる〔岩本論考、金論考、村瀬論考〕。とくに、デザインの類似が他人の空位ではないとの説明と、連続した型式変化として説明できるものではなく時間的な断絶があるとの説明を両立させることが、「復古再生」の認定には不可欠となる。なお、「伝世」の認定においても問題となったように、廃棄年代を製作年代の下限とみて相対編年を組み立てる「消費地編年」では時間軸上の断絶をみだしづらく、「復古再生」についても認定が困難な状況が多々あると予測される。そのため、本共同研究においては明らかな時間軸上の断絶をみとめうる事例研究に限定して実践することで、まずは「復古再生」とみなしうる考古事象の実態把握をおこなうこととした。なお、倭鏡を具体例に論じたように、モデルと「復古再生」品のあいだに技術的な断絶があれば、さらに「復古再生」とする認定の確実性が増す〔岩本論考〕。しかし、それは必要条件ではない。あくまでも重視すべきは時間軸上の断絶にほかならない。

「復古再生」の背景と意義 鏡では「復古再生」品とそのモデルとなった「伝世」鏡ないしは古鏡が同時期に併存していることを確実視できるため、プロセスを含めて「復古再生」を実証しやすい〔岩本論考、上野論考〕。

いっぽうで、確実な「伝世」例が未確認の器物では、「復古再生」のプロセスを考えるために別の手続きを必要とする。その一つの方法が、埴輪の「復古再生」の背景に迫るために、再利用を関連現象としてとりあつかい、同族意識にもとづく集団の「正統性」表示の可能性をよみとる村瀬論考のアプローチである。つまり、埴輪の「復古再生」においては、地域という限定的な空間のなかでの考古事象をとらえることによって、「伝世」を介在させない「復古再生」類型を実証したのである。

金論考では捩り環頭大刀の成立に際して「復古再生」の可能性を論じ、新たな威信財的器物の創出に際して象徴性を高める意図が読み取れるのではないかと指摘する。この場合には、現状では未確認の「伝世」品、いわば見えない「伝世」を想定するか、実物の「伝世」はないもののデザインの象徴性が継承されてきた点を背景とみて、「復古再生」を想定することになる。そして、見えない「伝世」を過度に強調することは考古資料の実態とはそぐわないため、論考でも示されたようにデザインの象徴性によって説明するのが妥当であろう。とすれば、実物の「伝世」を背景としない「復古再生」類型を設定しうる可能性が生じることとなり、これを示した点に金論考の意義があるといえよう。

そのうえで、「正統性」表示といった「復古再生」の意義を論じるには、そこにたんに古いデザインがモデルとして参照されただけなのか、明確に古さが重視されて意図的にモデルが選択されたのかを識別することはもちろん必要であろう。上野論考で中国の例をふまえて示されたように、古物を認識・運用する体系・制度があってこそ「復古再生」は生じる。考古学からそうした体系や制度の存在を実証することはきわめて困難ではあるが、倭鏡の「復古再生」においてはたまたま古い優品ではなく、小型鏡を含めた倭鏡の体系が復活している点を評価することによって、制度的な対応の可能性を積極的に評価した〔岩本論考〕。とはいえ、あまりに厳密な定義を与えて「復古再生」を狭くとらえてしまうと、広がりのある議論が阻害されかねない。いまの研究段階においては、定義をやや柔軟にとらえて、広い視野からの分析をまずは積み重ねることが、「復古再生」の実態解明につながると考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計43件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 岩本 崇	4. 巻 なし
2. 論文標題 古墳時代倭鏡の鑄掛け	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 昼飯の丘に集う 中井正幸さん還暦記念論文集	6. 最初と最後の頁 23-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本 崇	4. 巻 なし
2. 論文標題 三角縁神獣鏡の成立	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古墳文化基礎論集	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本 崇	4. 巻 第18号
2. 論文標題 いわゆる「奥才型木棺」と古墳時代の集団関係	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 島根大学法文学部紀要 社会 文化論集	6. 最初と最後の頁 71-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金 宇大	4. 巻 なし
2. 論文標題 日本列島出土三葉環頭大刀の系譜	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 昼飯の丘に集う 中井正幸さん還暦記念論文集	6. 最初と最後の頁 63-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金 宇大	4. 巻 なし
2. 論文標題 蕨手刀の始源に関する一考察 張出双脚足金具の構造から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 滋賀県立大学考古学研究室論集	6. 最初と最後の頁 157-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金 宇大	4. 巻 第104巻第1号
2. 論文標題 日本列島出土三累環頭大刀の系統とその性格	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 考古学雑誌	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金 宇大	4. 巻 なし
2. 論文標題 伝榛原町出土単鳳環頭大刀把頭をめぐる問題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古墳文化基礎論集	6. 最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本 崇	4. 巻 第4回東海古墳時代研究会
2. 論文標題 東之宮古墳の鏡	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東之宮古墳の研究はどこまで進んだのか	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩本 崇	4. 巻 17
2. 論文標題 福岡県勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群の再検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 島根大学法文学部紀要 社会文化論集	6. 最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩本 崇	4. 巻 38
2. 論文標題 「伝世」した同範鏡の一例 鳥取県中西尾6号墳出土の画文帯環状乳神獣鏡をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 島根考古学会誌	6. 最初と最後の頁 47-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩本 崇	4. 巻 中井正幸さん還暦記念論文集
2. 論文標題 古墳時代倭鏡の鑄掛け	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 昼飯の丘に集う 中井正幸さん還暦記念論文集	6. 最初と最後の頁 23-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大賀克彦・田村朋美・池田征弘	4. 巻 14
2. 論文標題 兵庫県出土鉛製耳環の鉛同位体比とその考古学的評価	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 兵庫県立考古博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 101-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大賀克彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 ガラスの材質分類と時期区分	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 いにしへの河をのぼる 古川登さん退職記念献呈考古学文集	6. 最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大賀克彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 天王塚古墳の玉類	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 特別史跡 岩橋千塚古墳群 天王塚古墳 2次・3次発掘調査報告書	6. 最初と最後の頁 129-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大賀克彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 唐堀遺跡1号古墳出土ガラス小玉の鉛同位体比	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 唐堀遺跡(1)(公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第672集)	6. 最初と最後の頁 188-190
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大賀克彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 猪ノ鼻(1)遺跡出土の玉類	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 猪ノ鼻(1)遺跡(青森県埋蔵文化財調査報告書 第616集)	6. 最初と最後の頁 190-202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉澤悟	4. 巻 22
2. 論文標題 二つの忍性骨蔵器 - 大和・額安寺と同・竹林寺出土の銅製骨蔵器の調査 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鹿園雑集	6. 最初と最後の頁 49-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉澤悟	4. 巻 なし
2. 論文標題 犀文様について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第72回 正倉院展	6. 最初と最後の頁 125-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉澤悟・鳥越俊行	4. 巻 23
2. 論文標題 大和・額安寺の忍性五輪塔に納められた骨蔵器群	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鹿園雑集	6. 最初と最後の頁 45-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 飯田浩光・南雲芳昭・吉澤悟	4. 巻 42
2. 論文標題 奈良国立博物館所蔵の盛装男子埴輪について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群馬県立歴史博物館紀要	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村瀬陸	4. 巻 10
2. 論文標題 平城京域の埋没前期古墳とその埴輪	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 埴輪論叢	6. 最初と最後の頁 17-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村瀬陸	4. 巻 平成30年度
2. 論文標題 菅原東遺跡の竪穴建物・土坑群出土土器	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 奈良市埋蔵文化財調査年報	6. 最初と最後の頁 97-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 なし
2. 論文標題 日韓における馬冑・馬甲研究の現状と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 柳本照男さん古稀記念論集 忘年之交の考古学	6. 最初と最後の頁 151-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人・馬淵一輝	4. 巻 7
2. 論文標題 京田辺市トツカ古墳出土遺物の再検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報	6. 最初と最後の頁 47-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真鍋成史・鈴木瑞穂・諫早直人	4. 巻 なし
2. 論文標題 交野市内出土鉄製品・鉄塊系遺物の調査成果について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 交野市の金属製品	6. 最初と最後の頁 53-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 なし
2. 論文標題 綿貫観音山古墳出土土馬具の系譜と製作地	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 綿貫観音山古墳のすべて	6. 最初と最後の頁 198-207
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田広	4. 巻 考古学リーダー 27
2. 論文標題 青銅器片の流通	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 弥生時代の東西交流ー広域的な運動性を考えるー	6. 最初と最後の頁 245-248
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田広	4. 巻 なし
2. 論文標題 古谷尾ノ端遺跡出土の銅剣について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 古谷尾ノ端遺跡 古谷仙田岡遺跡 古谷横枕遺跡 古谷立丁遺跡 古谷高木遺跡 古谷坪ノ内遺跡 古谷シヨクガ谷遺跡 埋蔵文化財調査報告書	6. 最初と最後の頁 735-747
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金宇大	4. 巻 なし
2. 論文標題 大加耶系龍鳳文環頭大刀の成立 東亜大学校石堂博物館所蔵龍鳳文環頭大刀を起点に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 柳本照男さん古稀記念論集 忘年之交の考古学	6. 最初と最後の頁 171-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金宇大	4. 巻 なし
2. 論文標題 日本列島出土母子大刀の系譜とその意味	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 羅州丁村古墳出土母子刀の製作技術復元	6. 最初と最後の頁 172-193
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金宇大	4. 巻 なし
2. 論文標題 大加耶 垂飾附耳飾 製作と展開過程	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歐亞 考古と文化 (慶北大学校 考古人類学科 40周年 記念 論叢)	6. 最初と最後の頁 513-540
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金宇大	4. 巻 なし
2. 論文標題 日本列島出土三葉環頭大刀の系譜	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 昼飯の丘に集う 中井正幸さん還暦記念論集	6. 最初と最後の頁 61-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 細川晋太郎	4. 巻 なし
2. 論文標題 藤田美術館所蔵の琴柱形石製品について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 柳本照男さん古稀記念論集 忘年之交の考古学	6. 最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 細川晋太郎	4. 巻 第26号
2. 論文標題 海野勝珉作《琵琶湖凶名刺盆》について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三の丸尚蔵館年報・紀要	6. 最初と最後の頁 53-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 アジア遊学237
2. 論文標題 三角縁神獸鏡生産の展開と製作背景	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 銅鏡から読み解く 2～4世紀の東アジア	6. 最初と最後の頁 126-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 なし
2. 論文標題 三角縁神獸鏡が語る古墳時代史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宮谷古墳の時代	6. 最初と最後の頁 9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 なし
2. 論文標題 荒尾南遺跡の青銅器と古墳出現期前後の青銅器生産	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 荒尾南遺跡を読み解く～集落・墓・生業～	6. 最初と最後の頁 76-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉澤悟	4. 巻 -
2. 論文標題 正倉院宝物にみる「使用痕」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古墳と国家形成期の諸問題	6. 最初と最後の頁 448-453
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阪口英毅	4. 巻 ナベの会考古学論集第1集
2. 論文標題 短甲編年と頸甲	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 和の考古学 藤田和尊さん追悼論文集	6. 最初と最後の頁 151-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阪口英毅	4. 巻 -
2. 論文標題 頸甲・肩甲編年再構築のための予備的検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古墳と国家形成期の諸問題	6. 最初と最後の頁 401-406
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上野祥史	4. 巻 -
2. 論文標題 南北朝時代に保有した鏡	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古墳と国家形成期の諸問題	6. 最初と最後の頁 389-394
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上野祥史	4. 巻 -
2. 論文標題 古墳時代中期の鏡と入西石塚	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 入西石塚古墳出土遺物整理報告書	6. 最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上野祥史	4. 巻 第128集
2. 論文標題 下北方5号地下式横穴墓の鏡と保有の意義 古墳時代中期中葉の鏡の分与・分配	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 下北方5号地下式横穴墓 宮崎市文化財調査報告書	6. 最初と最後の頁 241-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件 (うち招待講演 15件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 岩本 崇
2. 発表標題 いわゆる「奥才型木棺」と古墳時代の集団関係
3. 学会等名 かしまの歴史・文化を学ぶ会 令和3年度講座 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩本 崇
2. 発表標題 出土品解説 沖ノ島の鏡
3. 学会等名 令和3年度世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群公開講座 解説（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩本 崇
2. 発表標題 沖ノ島の鏡
3. 学会等名 令和3年度世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群公開講座（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩本 崇
2. 発表標題 「伝世鏡論」再考
3. 学会等名 令和3年度島根大学総合博物館アシカル講座 第2ステージ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大賀克彦
2. 発表標題 玉類の生産と流通からみた古墳時代社会の変化
3. 学会等名 令和3年度秋季特別展 玉からみた古墳時代 講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大賀克彦
2. 発表標題 玉からみた天王塚古墳と古墳時代の紀伊
3. 学会等名 令和元年度秋期特別展開連シンポジウム2 副葬品から天王塚古墳を考える(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田 広
2. 発表標題 青銅器からみた東予・中予・南予
3. 学会等名 令和3年度歴史文化講座(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田 広
2. 発表標題 対馬・壱岐 - 魏志倭人伝の道 -
3. 学会等名 令和3年度愛媛大学公開講座 世界の都市と地域(9)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田 広
2. 発表標題 土生遺跡が語る青銅器文化のはじまり
3. 学会等名 令和3年度佐賀県立博物館・美術館セミナー(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田 広
2. 発表標題 鐸と剣の系譜
3. 学会等名 令和3年度 よみがえる邪馬台国特別記念フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田 広
2. 発表標題 近江の青銅器文化 - 大岩山銅鐸への階段とその周辺 -
3. 学会等名 野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）第84回銅鐸研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田 広
2. 発表標題 弥生青銅器祭祀の転換
3. 学会等名 国立歴史民俗博物館共同研究公開セミナー「近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属器生産と社会」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田 広
2. 発表標題 日本列島における青銅器文化の始まりと特色
3. 学会等名 令和3年度 地域の特色ある埋蔵文化財活用事業シンポジウム「弥生人青銅器と出会う - 朝鮮半島から吉野ヶ里、近畿へ -」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩本 崇
2. 発表標題 古墳時代の画期性と倭国形成
3. 学会等名 島根大学法文学部山陰研究センター戦略的PJ2020年度10月研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩本 崇
2. 発表標題 「伝世」した同範鏡 鳥取県中西尾6号墳出土鏡をめぐって
3. 学会等名 島根考古学会2020年度12月例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩本 崇
2. 発表標題 東之宮古墳の鏡
3. 学会等名 第4回東海古墳時代研究会 東之宮古墳の研究はどこまで進んだのか（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 日向における馬生産のはじまりと国宝馬具の系譜
3. 学会等名 国際シンポジウム「国宝馬具とその時代～古代日向への騎馬文化の導入と展開～」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金宇大
2. 発表標題 製作技法の追究は何を明らかにするのか 半島系大刀工人の「技量」
3. 学会等名 「考古学」大勉強会 構造と行為
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金宇大
2. 発表標題 兵庫県域における外来系装飾付大刀の様相とその流通背景
3. 学会等名 第26回兵庫考古学談話会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金宇大
2. 発表標題 金工品からみた5世紀の東アジア
3. 学会等名 特別展「海を越えたつながり 倭の五王と東アジア」講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 既掘考古資料の再検討と山陰の考古学研究
3. 学会等名 山陰地域研究の最前線 島根大学法文学部山陰研究センター15周年記念行事
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 三角縁神獸鏡と宮谷古墳の時代
3. 学会等名 徳島市立考古資料館令和元年度考古学入門講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 魏晋代における華北系鏡群の編年と三角縁神獸鏡
3. 学会等名 第554回考古学研究会岡山例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 荒尾南遺跡の青銅器と古墳出現前後の青銅器生産
3. 学会等名 荒尾南遺跡を読み解く～集落・墓・生業～ 第34回考古学研究会東海例会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 岩本 崇	4. 発行年 2020年
2. 出版社 六一書房	5. 総ページ数 518
3. 書名 三角縁神獸鏡と古墳時代の社会	

1. 著者名 岩本崇・上野祥史・大賀克彦・水野敏典・金宇大・川畑純・諫早直人・磯貝龍志・村瀬陸・吉田広・細川晋太郎ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 島根大学法文学部	5. 総ページ数 282
3. 書名 器物の「伝世・長期保有」「復古再生」の実証的研究と倭における王権の形成・維持	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	稲田 宇大 (金宇大)  (Inada Udai)  (20748058)	滋賀県立大学・人間文化学部・准教授   (24201)	鉄製武器、金工品の検討
研究分担者	吉田 広  (Yoshida Hiroshi)  (30263057)	愛媛大学・ミュージアム・教授   (16301)	弥生青銅器の検討
研究分担者	吉澤 悟  (Yoshizawa Satoru)  (50393369)	独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館・その他部局等・部長   (84603)	正倉院御物&#65533;の検討
研究分担者	大賀 克彦  (Oga Katsuhiko)  (70737527)	奈良女子大学・大和・紀伊半島学研究所・特任講師   (14602)	玉類の検討
研究分担者	諫早 直人  (Isahaya Naoto)  (80599423)	京都府立大学・文学部・准教授   (24302)	馬具の検討

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	上野 祥史  (Ueno Yoshihumi)  (90332121)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・准教授    (62501)	中国系文物の検討
研究分担者	川畑 純  (Kawahata Jun)  (60620911)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員    (84604)	鉄製武器・武器の検討
研究分担者	阪口 英毅  (Sakaguti Hideki)  (50314167)	京都大学・文学研究科・助教    (14301)	鉄製武器の検討

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関